

京鹿子

日發行
三四月

5月号

— 近 詠 —

豊田都峰

心響集 その五

木末うれをさそひ春呼ぶ風ひと日

朝東風の真正面や合掌阿修羅

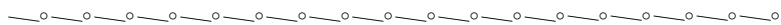
梅東風の寺は耳門をくぐりけり

春浅くまた竹幹の遠ひびき

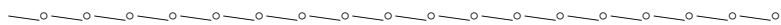
ミモザ咲く海風にほふ窓の辺に

片岡は海にひらけて咲かすミモザ





雑木芽吹き父生国に透きのなし
幾重なる芽吹稜線父の国
山国の父郷春星限りなし
物種の小袋祖母の字のももけ
折り癖に花種の名の判じ読み
打ち囃しやすらゐと花しづめ舞ふ
春嶺となりきらずして北を占む
とばし読む風にさそはれ青き踏む



—丸山佳子作品—

牡丹

丸山佳子



ぼ う た ん の 光 輪 雨 に し づ く せ り
ぼ う た ん の け ふ の こ ー ろ と 照 ら し あ ふ
山 吹 に け ふ の さ び し さ す こ し あ り
穴 い で し 一 ば か り の 蛇 の 縞 派 手 に
蛇 泳 ぐ 水 み て 五 体 ひ き し ま る

秀華採集

反対のしづかな挙手や雪催

井上 菜摘子

「しづかな挙手」は意志の強さでもある。そんな動作を包むのが「雪催」、この組み合わせを評価したい。薄暗い空が押し付けるように迫る「雪催」はまた静かでもある。

加齢てふ病あるらし春を待つ

畑 佳与

冬雲のひねもす低く礼を欠く

小 埜 眞 理

前句、一応信じながらも温暖な「春を待つ」心はよい、病がなくなるか知れないから。後句の「礼を欠く」措辞に注目、礼には単なる付き合い以上の思いがあるから。

— 近 詠 —

鈴鹿 仁

二輪草

う ち と け て 二 輪 草 の 風 と ゐ し
神 丘 は 鳥 の 楽 園 花 洛 の 忌
鳥 つ る む 一 途 と 謂 ふ は 愛 し き

大將軍八神社二句

春 陰 の 影 と も な り し 天 球 儀
曆 神 の 方 位 の 開 く 弥 生 月



— 近 詠 —

和田 照海

衣更着

母ひとり衣更着の灯の野末なる
吊橋にきて狐火の引き返す
三千の水を掬ひて紙漉女
而して風の過客の牡丹雪
猪さばき十指を雪に拭ひけり





神麓集

春の風邪 藤岡 紫水

春の風邪悪夢良夢をひとそろへ
堂塔の雪解をこぼす室生寺
水音のどこかたるみて梅の花
仄かなる影曳き白魚透けてをり
乾きつつ砂をこぼせり干若布

薔薇の黙 竹貫 示虹

薔薇散るや死とねむりとは似て非なる
蔓薔薇の散るに音なし老いもまた
流速に逆らはず生きはや立夏
五月過ぐひとり暮らしの音立てず
八十八夜遺さる嘆き妻知らず

松田 都青

水平な階段昇る初詣
広漠の山野に初日天の無垢
恋すれば動く脳かも年新た
初湯して心の錆はまだ付かず
老ゆるとは賀状来ぬことかもしれず

さざんか日和 北川 孝子

寒極む指紋の渦のよく緊まり
道問うてよりの道ずれ春寒し
組板に月日のくぼみ寒豆腐
名残雪頷くだけの友見舞ふ
人脈を大事にさざんか日和かな

初午 丸井 巴水

初午やつくね置かるる饅頭喰ひ
石垣の隙を衝きたる草若葉
おたふくと呼ばれ長寿の福の豆
木魚に弾き出さるる萩若葉
裸婦画集小脇にはさむ若葉雨

春の雪 塩貝 朱千

寒林の奥みづいろの池を抱く
ゆらゆらと海市の虹を見にゆかむ
握手して思ひ出せない春の雪
男前猫の店番マフラーして
春浅し人好き猫の恋知らず



京鹿子集

豊田都峰選

反対のしづかな挙手や雪催

片栗の花おきざりにきし自愛

忘れ物係へまはす雪兎

たつぷりと化粧水たんぼぼが咲いた

加齢てふ病あるらし春を待つ

深呼吸今朝の大きな雪の富士

雪の日のジャズのながれる定食屋

恍惚とかげろふを食む迷ひ牛

冬雲のひねもす低く礼を欠く

八百万の神居てサンタが迷走す

亀岡 井上菜摘子

鎌倉 畑 佳与

東都 小堀 眞理

思ひ出も炉火もはるけし餅こがす

七草のバックにラデツシユ何やこれ

寒明けや路面電車の試運転

吉兆や唐獅子舞の囃む宴

木の芽晴公園に本持ち出して

コトコトと木の芽煮る母割烹着

去年今年紅白見つつ和気藹藹

元朝や白一色に心を洗ひ

お雑煮の湯気にかくれし涙あり

初夢や爛酒馳走在りし日よ

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

美しき言葉でかはす年賀かな

札幌 野村 鞆枝

水茎の跡うるはしき年賀状

吐く息を呑み込んでなほ雪しまく

地下街に降りて冬帽湯気たつる

吹雪来て車追ひ抜く速さかな

雪の夜騒ぐ鴉や終夜

雨降つて地固まらず雪解けり

冬ざれや夜中に襲ふ齒の痛み

通院は残る寒さが身にしみて

初場所はきれいどころに目が移り

友と会ふ日脚伸ぶこと嬉しくて

秩父峡大氷柱垂れライトあび

冬の旅駅弁開けばメール鳴る

冬の墓地一人焼香猿そばに

路地は雪鉄瓶鳴りて茶の香り

元旦や電話が伝ふ友の死を

女力のたとへば菰の寒牡丹

実千両啄まれゐるうれしさよ

顔に受く初雪よそに住み慣れて

人日や誰とも会はぬ日と決めし

「しまつた」の形で凍る足の跡

直江 裕子

梅いまだ死のだんどりの少しづれ

佐助に呼ばれたやうな夕まぐれ

少年の恋文に似て霜の華

水仙の蒼き日暮の一行詩

白鳥の声突き上げてゐる闇夜

犬ふぐり踏んづけられてから笑ふ

木食の碑に影を置き冬の蜂

飯の世の赤き待針冴え返る

ゆびきりのちひさき指へ春よ来い

四股を踏む朝の韻き風光る

夕映えや零戦映画に初泣きす

雪かぶる白虎隊の墓城遙か

試し撃つスペンサー銃深雪晴れ

天守閣に望み城下の雪しんしん

初みくじ中吉と出て眉開く

松を過ぎ体内時計動き出す

結晶を葉先に庭を初雪舞ふ

蠟梅や引き揚げ船の話聞く

ばたん雪銀座の力また光る

粥噴きて窓さらさらと雪くるか

爪ばかり延びて気楽にはや二月

段葛芽吹き息と歩きけり

佐々木紗知

高野 春子

布川 孝子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉